

「大正大学研究紀要 第100輯にあたって」

第31代学長 星野英紀

私事にわたり恐縮であるが、『大正大学紀要』にかつて執筆させていただいたことは私にとって特別な意味を持っている。私は2000年度学位論文を本学に提出した。その中の最も重要な一章が『大正大学紀要』61号（1975年）に掲載させていただいた論考だからである。論文提出した2000年は57歳であった。もちろん論文博士である。その頃の私は大学院を満期退学してから20年以上が経過していたので、それまでに書き上げた論文を直しつつ博論としてまとめたのである。その作業は実は結構大変である。個別論文を繋げて一つの筋の通った内容を持つ複合的論文に作成するには、各論文の、特に最初と最後の部分を相当大胆に書き直さなければならない。

さらに厄介なのは、20年以上も前に書いた論文には、その間の他学者関連研究成果を反映し修正しなければならぬからである。過去の研究業績に当たることは手間の掛かることである。私のように新しいものの好きは新規のテーマに取り掛かることは楽しいことなのであるが、過去の始末を付けることは正直に言つて大変な苦痛だった。そこで普段はそれほど計画的な人間では無い私も、1年間のスケジュールを作り、博論書きに没頭した。とくに一番時間がありそうなのが夏休みだったので、1週間毎のスケジュールを作り、毎日8時間ぐらい論文修正を行った。

つまりそれまでの25年ほどの間の論文を全部細部に亘つて読んだということである。そこで分かったこととは何か。

自分の博論のなかで学的意義のありそうな部分とそれほどでもない部分が、自分ではつきり分かったことだった。

実はその時、学的意義の高いと思った論文が実は1975年の『大正大学紀要』61号に掲載して頂いた論文であることが、はつきり分かった。資料的にしつかりしたものに基づいており、また類似の資料が無いものだったからである。そして当時はまだまだ研究上空白であったテーマに真正面から取り組んだものだからである（これは私の自惚ればかりでなく、博論を出版させて頂いた後にも同僚研究者複数から同様の評価をいただいた）。

それは四国の愛媛県の山奥の遍路宿に保存されていた昭和10年代の1万人ほどの宿泊者を記録した宿帳であった。名前、住所、年齢、宿泊日などを期した内容で、それを整理分析することで、まだだれも学的に分析したことのない近代の四国遍路の実態が数的データから明らかになった。

確かに学的意義はあるのだが、なにしろ1万人の宿泊者を項目別に整理したもので、読み物としては退屈である、グラフや数字の表などがやたら多い、論文自体が長い、というようなわけで、なかなか掲載してくれるような場所が見つからなかったのである。それを大学の紀要ということで掲載させて頂いた。

つまり研究紀要は、研究者の研究成果を発表するところであるから、読み物としての面白さ、内容の一般性の程度は特に最優先されない。他方、市販の発表媒体は字数が限られている、テーマも一般受けしなければいけない、文章も読みやすくあつてほしい、というような要請がある。1975年といえば私は32歳の時である。文章力なども未熟であったので、なおさら掲載してもらえない場所などは限られていた。非常勤講師時代である。母校の『研究紀要』だからこそ掲載させて頂けたのだと感謝している。

ながながと私のことを書き連ねてしまった。しかし、『大正大学研究紀要』に限らず『紀要』類は昔からひどく地味なもので、この世の誰が繙くであろうかと思うような雑誌である。しかし、そうした『紀要』が研究者を育てていくのである。

最近では活字媒体が持つ影響力の相対的低下、厄介な内容と思われるような読み物への社会的無関心の増大などが

あり、『紀要』などへの風当たりは強い。デジタル化はますます促進されるべきである。しかし効率化という大ナタで地道な研究をも軽視するのは大いに問題がある。

ところでデジタル化によってもたらされた極めて深刻な害毒は、コピーの大流行である。簡単に他者の論文内容をコピーできる。学生のレポートから研究者の論文に至るまで無断引用が横行している。残念ながら本学も例外ではない。理工系学部の無い本学の場合は、一般社会の耳目を集めるような研究論文が『紀要』に掲載されることはまずない。しかしささやかな私の例を挙げたように、『紀要』論文が筆者の研究生活の土台となるようなことはままある。それゆえ、今後とも『紀要』の持つ重要性をしっかりと認識して、将来性が期待されるチャレンジングな内容の論文が一つでも多く掲載されることを切に望むところである。現在、大学の生き残り戦略の一環として大正大学は学部中心の展開となっている。これはやむを得ないことである。しかし多くの学科の上に大学院前期・後期課程を有している。それゆえ大正大学における研究活動の充実は社会への責務に他ならない。

(2015年2月)